

THE A MUSEUM

Vol.2-1 第4号 2007.7.12

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

団塊世代の地域デビューは博物館から

館長 藤野龍宏

【大河ドラマと博物館】

今年のNHKの大河ドラマは武田信玄を主人公とした「風林火山」ですが、昭和38年の「花の生涯」以来欠かさず見ているという方も多いはず。大河ドラマで放映されると、必ず出版ブームが起きます。どこの書店でも原作本や関連本が山と積まれます。映像を思い浮かべながら原作を読むのも大河ドラマの楽しみ方の一つですね。

もう一つは観光ブームです。地元と旅行者が一体となって様々な旅行プランやイベントを繰り広げます。その際に必ず組み込まれ、最低でも1ヶ所は訪ねるようになってるのが現地の博物館です。「風林火山」にちなんだ旅行者のパンフレットを見ても、まずは笛吹市に一昨年オープンした山梨県立博物館で、山梨県の歴史と風土の概略を学び、それから甲府市の武田神社と武田神社宝物殿、甲州市の信玄公宝物館や恵林寺など、お目当ての小さな博物館や史跡を訪ねるようなコースが一般的です。

このように、博物館はその国や地域を知るための、最も手軽なガイダンス施設といえるでしょう。

【埼玉県民と歴史と民俗の博物館】

それでは、地元、特に埼玉県民にとって、この歴史と民俗の博物館はどんな意味があるのでしょうか。



県の人口の推移を見ると、昭和40年国勢調査時の約301万人が25年後の平成2年には約640万人となり、年平均13.5万人も増加しています。それから15年後の平成17年には約705万人ですから、この間の増加は年平均4.3万人でだいぶ落ち着いてきました。昭和40～60年代にかけて人口の増加が極めて多かったことがわかります。詳しくは述べませんが、社会増即ち他県からの流入者が多いことも大きな特徴です。また、毎日他県へ流出する人数（通勤通学者数）は、平成7年127万人、平成12年119万人、直近の平成17年は113万人と、徐々に減る傾向にはあるものの、全国1位又は2位を維持し、しかもその100万人以上が東京に流出しています。

これらのデータから、埼玉県民の特徴として、高度経済成長期を中心に他県から流入した人が多く、かつその生活基盤が東京を中心とした県外にあり、地域との関わりが薄いことが挙げられます。この世代は、いわゆる団塊の世代とも重なっており、これから大量に退職を迎えます。退職後の生き甲斐や健康の保持増進のため、「地域デビュー」「地域へのソフトランディング」を円滑に行うことは、本人達にとっても行政にとっても大きな課題となっています。

そこで博物館の出番です。地域デビューのきっかけに、地元埼玉県を知るためのガイダンス施設として博物館を御利用下さい。博物館を通して埼玉の歴史と民俗を知り、埼玉に愛着を持つこと、これが地域デビューの始まりではないでしょうか。「埼玉もまんざら捨てたもんじゃないな！」と思うところから、興味を広げ、様々な学習活動やボランティア活動に関わられてはいかがでしょうか。御利用をお待ちしています！！

はじめに

「旅行は楽しい。」これは誰もが持っている旅行に対する第一印象ではないでしょうか？

新聞には連日、旅行の広告が掲載され、町中の旅行会社の前にはおびただしい量の旅行パンフレットが並んでいます。これらは、日本人が旅行好きである証拠と言えます。

ところで、このような「旅行好き」はいつ頃から始まったのでしょうか。

この企画展ではかつての埼玉の名所・観光地を紹介し、時代と共に移り変わっていく旅行のあり方を通して、旅行が個人や社会に対して持っていた大きな力についても探ります。

1. 江戸時代の旅

交通条件が悪かった江戸時代以前の旅は、決して楽しいものではありませんでした。旅の目的も古代では国家命令による旅（租税の運搬や防人）、中世では信仰に基づく社寺参詣や僧侶の修行のための旅などが主でした。

ところが、江戸時代に入り、街道が整備され、貨幣制度が確立されることにより、旅の快適さは一気に増しました。旅は人々の好奇心と遊樂を満たす格好の手段となりました。

このコーナーでは、旅行ガイドブックである道中記や県内の名所を描いた浮世絵、旅道具などを展示します。



写真1 早道 / 個人蔵

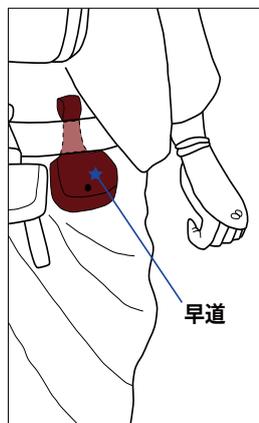


図1 早道の使い方

特に旅道具には軽装で旅ができるようにさまざまな工夫が見られます。例えば、「早道」(写真1)と呼ばれた財布は帯に挟んで使った小銭入れです。懐に入れた財布よりも早くお金が取り出せるようにと考え出されたものです。

2. 東京郊外行楽地の誕生

明治時代に入り、日本にも鉄道が敷設され、時代と共に交通網の整備が進みました。また、都市部の中流階級の人々に生活を楽しむ余裕が生まれました。そのような大正から昭和初期に、日本人の旅行熱は一気に高まりました。

「東京から埼玉に観光に来たの?！」

ちょっと信じられないかもしれませんが、東京近郊には日帰りまたは1泊2日で楽しめる行楽地が数多く誕生したのです。この頃に刊行された旅行地図やガイドブックには埼玉の観光地もしっかり載っています。旅行地図に掲載された埼玉の主な行楽地はどこでしょうか？(答えは写真2の説明文の中にあります。)

3. 観光に誘う一鳥瞰図の世界一

大正から昭和初期の旅行ブームの中で、人々を誘致するために鉄道会社や旅行会社、行政機関は



写真2 東京中心日帰り一泊旅行鳥瞰図 / 個人蔵
昭和9(1934)年発行。主だった観光地は赤丸で大きく示されます。埼玉県では大宮公園、牛島の藤、長瀬、三峯山、吉見百穴、武蔵嵐山、山口貯水池が収載。

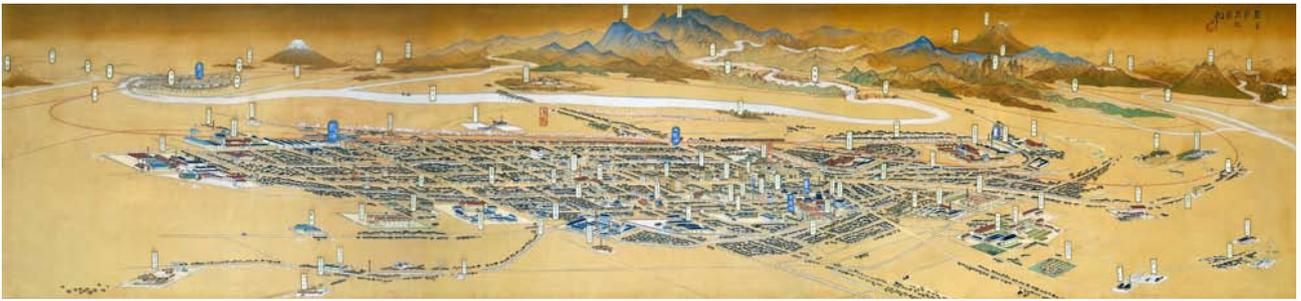


写真3 吉田初三郎画 / 熊谷市鳥瞰図原画 / 熊谷市立熊谷図書館蔵 昭和11 (1936) 年 絹本着色

さまざまな工夫を考えました。鉄道割引を含む遊覧券の販売、新たな観光地の開拓の意味もあった国立公園の指定、観光パンフレットの発行などです。現在の観光協会の前身といえる保勝会^{ほしょうかい}という組織も県内に多く結成され、活発に活動しました。

このコーナーで取り上げる「鳥瞰図」は、この時代に流行した観光パンフレットのスタイルです。鳥瞰図とは鳥の目で空から見下ろしたように地上を描いた図のことで、日本には中世からその技法は存在しました。

この時代の鳥瞰図絵師の第一人者、吉田初三郎^{はつさぶろう} (明治17～昭和30年・1884～1955) は独特の風景展望図を完成させました。デフォルメされた地形、色彩豊かな鳥瞰図に多くの人々が魅了されました。鳥瞰図は折りたたみ式で、横に広げると全体が見渡せ、旅先では必要な部分を使いました。また、裏面には主要な観光地が写真と共に紹介されていました。折りたたんでしまうとわずか縦18cm、横10cmほどの観光パンフレットですが、広げると横80cm前後になります。そして、その原画の大きさは熊谷市鳥瞰図 (写真3) を例にとると、縦57cm、横250cmという大きなものです。町並みなどを細かく描くためにはこのぐらいの大きさが必要だったのでしょう。

初三郎は鳥瞰図を一人で描いたのではなく、工房を構え、弟子達の協力のもとに鳥瞰図を数多く

製作しました。会社組織を立ち上げ、旅行情報誌「観光」や「旅と名所」を発行したり、観光イベントを企画するなど多方面で活動した点も近年再評価されています。

県内の鳥瞰図を描いた初三郎と同時期の絵師には、金子常光^{つねみつ}、前田虹映^{こうえい}、新見南果^{にのみなんか}、柳城^{りゅうじょう}、月華、タナカセイなどが確認されています。

さて、今回の展示では観光パンフレットとともに絵はがきも多く展示しています。カメラが高級品だった時代は、旅行のお土産として絵はがきが数多く発行されました。絵はがきは戦前の埼玉の風景や町の様子が記録された資料としても貴重なものです。

私たちの身近な場所に東京から多くの人々が訪れた大正から昭和初期。その旅行ブームを振り返りながら、埼玉もまだまだ捨てたものではない、その魅力再発見の機会となれば幸いです。

(展示担当 水口由紀子)

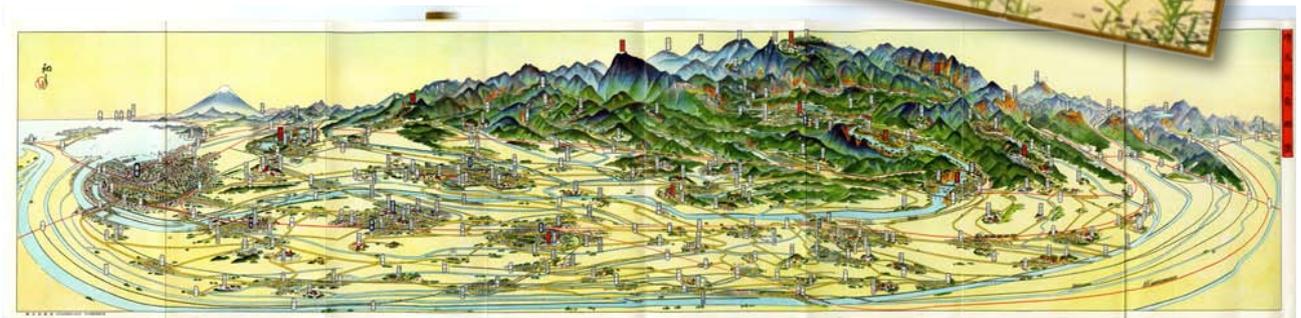


写真4 吉田初三郎画 / 埼玉県鳥瞰図 昭和9 (1934) 年

たまには神楽を見に行こう！

『秩父地方の神楽一長瀨町』を刊行しました

平成18年4月1日に埼玉県立博物館と埼玉県立民俗文化センターが統合して、埼玉県立歴史と民俗の博物館として新たな一步を踏み出しました。そして、民俗芸能・民俗工芸という無形民俗文化財を専門に取り扱ってきた旧民俗文化センターの事業と理念は、当館で引き継ぐこととなりました。今回の報告書もその一つです。民俗芸能の分野では17集目となります。

秩父地方は神楽の宝庫です。古くから多くの神楽が伝承されていますが、その伝承系譜から、秩父神社系・白久系・根古屋系・井上系・両神系の五つに分けられています。すでに白久系の神楽については、平成11年度に『秩父地方の神楽一荒川村・大滝村』として刊行しました。

今回取り上げた長瀨町の神楽は秩父神社系の神楽です。秩父夜祭りとして全国的にも知られている古社・秩父神社では、近世から神宮によって神楽が伝えられてきました。それが明治に入ってから氏は子たちが担うようになり、それとともに周辺各地でもこの神楽を伝習し、地元の神社で奉納するようになりました。現在、秩父地方に伝承される神楽は26か所ありますが、なんとそのうちの16か所は秩父神社の神楽を伝えています。このことから、秩父神社系の神楽が、秩父地方の神楽の中心をなしていることがわかります。

今回収録したのは、長瀨町で伝承されてきた寶登山神楽と岩田神楽です。いずれも秩父神社神楽の流れを汲んでおり、寶登山神楽は明治43年か

ら始まり、岩田神楽は寶登山神楽から大正3年に習っています。

この二つの神楽団は、人手の足りないときはお互いに応援しあったり、合同で練習会を開くなど、長年にわたって親密な関係を築いてきました。

報告書を作成するにあたっては、その前年に一年間にわたって地元の神社を中心として奉納される神楽のビデオ撮影を行っていますので、それらを参考としながら調査を行いました。

二つの神楽団の由来・演目・演出・用具などについて、写真も多く取り入れてわかりやすい内容となるよう努力しました。また、『第一章 秩父の神楽一由来と系譜一』は秩父の民俗芸能に精通している栃原嗣雄氏に、専門の立場からの玉稿を賜りました。

とはいうものの、神楽のおもしろさは本を読んでいるだけで伝わるとは思いません。実際に現地で見るとしかありません。まさに‘百聞は一見にしかず’です。寶登山は秩父の観光名所ですので、遊びがてらのぞいてはいかがですか。八十八夜(5月2日)には寶登山山頂で奉納します。ロープウェイに乗るもよし、神楽師さんと一緒に麓から歩くもよし、新緑あふれる中での神楽見学も一興です。また寒い節分の豆まきに参加して豆を拾ったり、神楽の餅を拾ったりして、たくさんの福をいただくのもおすすめです。ぜひ一度試してみてください。

(民俗文化担当 三田村佳子)



寶登山神楽「大蛇退治」



岩田神楽「奉幣」

学

芸

員

の

お

と

企画展「博物館発→小さな旅 ー埼玉遊覧案内ー」に寄せて

先日、晩酌の肴にテレビを見ていました。テーマは、アジアの空のパイロット不足でした。日本の航空界も例外ではなく、パイロットの育成と確保の課題を掘り下げていました。

また、拍車のかかるグローバル化のムーブメントの中で、平成 22 (2010) 年には東京国際空港、所謂羽田空港の 4 番目の滑走路の利用が本格化するということを知りました。いかに空路による物流・人間交流が増大しているかを感じざるをえませんでした。

羽田空港は、昭和 6 (1931) 年、日本で最初の国営民間航空専用空港「東京飛行場」として産声をあげました。大西洋単独無着陸飛行に初めて成功したリンドバークが、北太平洋航路調査のためにシリウス号で来日したのもこの年でした。

即ち、昭和時代の初めは、今に続く空の旅の始まりの時代でもありました。

さて、日本における近代の旅の幕開けは、明治 26 (1893) 年の喜賓会 (Welcome Society) に始まるようです。喜賓会は、渋沢栄一と井上馨外務大臣が、東京商工会議所内に設けた我が国で初めての外国人客誘致幹旋機関でした。

当時 (19 世紀末) のヨーロッパは、アメリカ観光ブームでした。20 世紀になると、今度はアメリカ人のヨーロッパ観光が盛んになりました。交通手段は、客船です。

明治 45 (大正元・1912) 年のタイタニック号の惨事は、豪華大型客船による旅の時代の出来事でした。折しもこの年、喜賓会は、外国人観光客誘致による外貨獲得を主要な目的とするジャパン・ツーリスト・ビューロー (現在の財団法人日本交通公社。JTBF) に使命の一部を譲り、その歴史を閉じました。

余談ですが、昭和 38 (1963) 年には営業部門が分離して株式会社日本交通公社 (現、株式会社 JTB) が発足しています。

さらに蛇足ですが、喜賓会の本来の使命であっ

た国際観光振興の機能は、ジャパン・ツーリスト・ビューローから財団法人国際観光協会へと移り、さらに何度かの変遷を経て、現在の独立行政法人国際観光振興機構 (JNTO) が担っています。

今回の企画展「博物館発→小さな旅ー埼玉遊覧案内ー」では、日本の大正・昭和初期の旅と観光を取り上げています。大正時代末期から国内観光が増大します。

大正 8 (1919) 年には、「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定されます。埼玉県では、大正 10 (1921) 年「埼玉県史蹟名勝天然記念物調査会」を設置し、指定候補調査に着手します。

大正 11 (1922) 年には「鉢形城址」(寄居町) が国指定史蹟の仮指定を受け、翌大正 12 年には「吉見百穴」(吉見町) が国指定史蹟、さらに大正 13 年には「長瀬」(長瀬町) が国指定名勝天然記念物になっています。いち早く指定されたこれらの文化財は、急速に形成されつつあった都市住民の行楽の対象として認知され、観光資源として地域に受け入れられました。各地には「保勝会 (観光協会の前身)」が立ち上げられたのは言うまでもありません。

しかし、昭和初期は、不況の波と軍靴の音が響く時代でもありました。これまで順調に拡大していた訪日外国人観光者数と日本人国内観光者数は、共に昭和 11 年 (1936) 年をピークに減少し、第 2 次世界大戦へと時を移していきました。

(民俗文化・展示・資料調査担当 井上 肇)



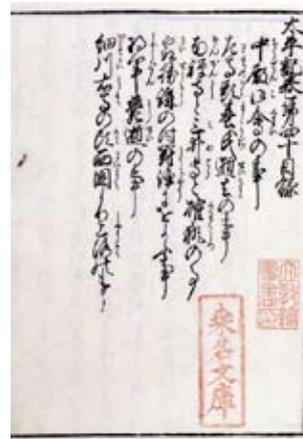
新収集資料の紹介 ～平成18年度収集資料「太平記」～

博物館の大きな仕事のひとつに、絵画や彫刻、工芸品、古文書、考古遺物、民具などの資料を収集し、それらの資料を次の世代に継承していくことがあります。当館においてもこれまで郷土埼玉の歴史や文化に関する資料の収集を積極的に進めてきました。そうした中で「木曾街道六十九次」や、「鯰絵」、「引札」などの当館固有のコレクションが形成され、「国宝 太刀」や「太平記絵巻」に代表されるように所蔵資料の充実が図られてきました。

今回は、平成18年度に新たに収集された資料の中から「太平記」を紹介します。「太平記」は、鎌倉時代末から南北朝時代の動乱を描いた軍記物語で、全40巻で構成されています。物語の成立年代は詳しくわかっていませんが、応安から永和年間（1368～79）頃には成立していたと考えられています。

江戸時代には、数種の整版本も刊行され、寛文期前後には絵入りの整版本も刊行されるようになります。本資料は、寛文年間（1661～73）頃に刊行されたもので、絵入り・平仮名交じり、振り仮名句点付刻の整版本です。

惣目録と、源氏にまつわる剣の物語が記述された剣巻を合わせた1巻と、第1巻から第40巻まで各1冊で構成されたものですが、第11～13・



初丁の蔵書印

15・16巻の5冊が欠けています。

本の体裁は丁寧なものですが、線がやや太く、振り仮名などには欠けも見られることから、初刷りではないと思われます。表紙には、題簽と呼ばれる本の左上や中央に題名などを記した短冊形の紙があり、巻数は小口にも墨書されています。

全巻の初丁の余白に長方形の朱印「立教館図書印」の蔵書印が捺されています。この印は松平定信の蔵書印のひとつとされ、寛政3（1761）年に設置された白河藩校立教館の蔵書印です。

また、第23巻以降には「桑名文庫」の印も認められますが、この蔵書印は文政6（1823）年に伊勢桑名に転封となった後に捺されたものです。

（資料調査担当 鈴木秀雄）



「太平記」全巻



押し絵と本文

埼玉県指定史跡熊野神社古墳は、桶川市川田谷の荒川と江川にはさまれた台地先端部近くにある直径 50 m 近くの大型円墳です。

1928(昭和 3)年、熊野神社社殿の改築に際して、古墳の副葬品である多量の玉類と石製品や筒形銅器などが発見され、1953(昭和 28)年には国重要文化財の指定を受け、現在は当館に常設展示されています。

副葬品のうち玉類には硬玉勾玉・瑪瑙勾玉・瑪瑙棗玉・碧玉算盤玉・碧玉管玉・瑠璃小玉、石製品には碧玉石釧・碧玉紡錘車・滑石紡錘車・碧玉巴形・碧玉筒形があります。

これらの製作された年代は古墳時代前期後半から中期初頭(4世紀後半から5世紀初頭)に位置付けられ、荒川(旧和田吉野川・入間川)の広大な沖積地に進出しようとする大和政権からの分配品と考えられてきました。その大きな理由は、北武蔵地域にはこれらの玉類を製作した遺跡と原石産地が発見されていなかったことにありました。

しかし 1979(昭和 54)年、熊野神社古墳の荒川をはさんだ対岸低地、川島町正直字山王日枝神社前町道下で農業用水管埋設工事が行われ、地下約 3 m の地点から碧玉管玉の工程品 106 点、碧玉釧の工程品 1 点、勾玉凹面研磨用砥石 1 点が出土しました。また東松山市高坂台地縁辺部の都幾川右岸の葛袋地区では碧玉原産地も確認されのです。石釧の出現は古墳前期が主体で、中期初頭にはなくなります。管玉工程品の中には釧を製作する工程で生じた円盤部分を再利用したものもあり、管玉工程品も同時期であることがわかります。この正直遺跡では、熊野神社古墳とほぼ同時期に釧や管玉・勾玉が作られたと考えられますが、出土した土器が古墳時代後期のもの 1 点だけであったため、玉作の時期については確定できませんでした。

ところが最近になり葛袋から続く下流の、都幾川右岸自然堤防に位置する東松山市高坂の反町遺跡で、水晶と碧玉の原石・工程品・剥片を中心と

して、瑪瑙やガラスの剥片、製作のための鉄芯・弾み車・砥石が発見されました。また工房と考えられる工作用ピットをもつ竪穴式建物も検出され、古墳時代前期に玉作が行われていたことが明確になりました。また熊野神社古墳と同じく桶川市川田谷にあり、荒川上流に位置する前原遺跡でも古墳時代前期の住居跡から水晶や碧玉の原石と剥片が発見されています。

このような状況から、東松山市高坂から都幾川・市の川など入間川水系が合流し、さらに和田吉野川水系であった現荒川とが合流する地域にあっては、古墳時代前期から玉作が行われていた事は確実といえます。また未知の玉作遺跡発見の可能性も大きい事を示しています。

熊野神社古墳の被葬者の性格はさておき、副葬品の玉類が西日本地域で製作され、大和政権により分配されたとの解釈は再検討が必要となります。この課題の解決には玉類の型式学比較、工程品からみた工人の技術系譜分析、石材の同定などが必要となり簡単ではないようです。

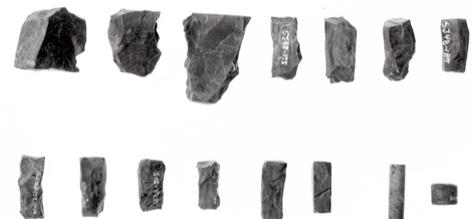
掲載の反町遺跡玉作工程写真は(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団から提供いただきました。厚くお礼申し上げます。

(企画担当 石岡憲雄)

水晶製勾玉
工程品



碧玉製管玉
工程品



THE A MUSEUM



歴史と民俗の博物館イベント情報（7月～9月）

企画展「博物館発→小さな旅一埼玉遊覧案内」 会期 7月14日（土）から9月2日（日）までです。
 ミュージアムグッズフェアを、7月24日（火）～8月5日（日）まで開催しております。
 スポット展「納涼、幽霊画コレクション」 会期 8月11日（土）から8月26日（日）
 7月1日（日）から8月31日（金）の間は、午後5時まで開館時間を延長いたします。
 ノスタルジックイベント「夏休みの思い出」 8月24日（金）～26日（日）

7月	8月	9月
14日（土） 土曜子どもまつり・博物館裏方探検隊	19日（日） ミュージアムトーク	
15日（日） ミュージアムトーク・企画展示解説 SL見学会（日本工業大学）	21日（火）～24日（金） 学芸員の仕事紹介	
18日（水） 学芸員の仕事紹介	24日（金）～26日（日） ノスタルジックイベント	
21日（土） 博物館裏方探検隊 SL見学会（日本工業大学）	24日（金） 藍の型染めハンカチ作り	
22日（日） ミュージアムトーク	25日（土） 博物館裏方探検隊 ミニSL乗車会（日本工業大学）	
25日（水）・27日（金） 張り子人形作り	26日（日） 企画展示解説・ミュージアムトーク	
28日（土） 企画展講演会 ・博物館裏方探検隊	28日（火）～31日（金） 学芸員の仕事紹介	
29日（日） ミュージアムトーク	1日（土） 博物館裏方探検隊	
31日（火）～8月2日（木） ベーゴマ作り	2日（日） 企画展示解説	
4日（土） 博物館裏方探検隊 SL見学会（日本工業大学）	8日（土） 土曜子どもまつり・博物館裏方探検隊 ミニSL乗車会（日本工業大学）	
5日（日） ミュージアムトーク	9日（日） 歴史民俗講座・ミュージアムトーク ミニSL乗車会（日本工業大学）	
7日（火）・8日（水） ミニ団扇作り	14日（金） 藍の型染めハンカチ作り	
10日（金） 学芸員の仕事紹介	15日（土） 博物館裏方探検隊	
11日（土） 企画展示解説・博物館裏方探検隊	16日（日） ミュージアムトーク	
12日（日） ミュージアムトーク	19日（水） 学芸員の仕事紹介	
14日（火）～17日（金） 学芸員の仕事紹介	22日（土） 博物館裏方探検隊	
18日（土） 博物館裏方探検隊 ミニSL乗車会（日本工業大学）	29日（土） 土曜子どもまつり・博物館裏方探検隊	
	30日（日） 民俗工芸実演	

※赤字は事前申し込みになります。



交通機関
 東武野田線・大宮公園駅下車徒歩5分
 JR宇都宮線・土呂駅下車徒歩18分

埼玉県立 歴史と民俗の博物館 (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地
 TEL. 048-641-0890 (管理)
 048-645-8171 (学芸)
 FAX. 048-640-1964
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
 Vol.2-1 (通巻) 第4号
 2007年7月12日発行

